Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-04-29

派生語と補部の受け継ぎの関係 : ＜ disagree/miscalculate + that 節＞を中心に

住吉, 誠

(Citation)
Journal of Corpus-based Lexicology Studies,1:1-12

(Issue Date)
2018-12

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010584

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010584

KOBE UNIVERSITY

Journal of Corpus-based Lexicology Studies, Vol. 1 (2018)
Japan Association for English Corpus Studies, Lexicology SIG
ISSN: 2434-169X

派生語と補部の受け継ぎの関係

—＜disagree/miscalculate + that 節＞を中心に—*

住吉 誠（摂南大学）
sumiyosi@ilc.setsunan.ac.jp

Derived Words and Complement Inheritance with a Special Focus on "*disagree*/*miscalculate* + *that*-clauses"

SUMIYOSHI Makoto (Setsunan University)

概要

Carlson and Roeper（1981）は，動詞と派生語の間に見られる補部の受け継ぎについて直観判断にもとづく議論を展開し，接辞などが付与された派生語は，もとになる動詞の名詞句補部のみを受け継ぎ，他の統語的な構造は受け継ぎを阻害されると述べている。本小論の目的は，disagree とmiscalculate に焦点を当てて，そのような直観判断の妥当性を実証的に検証することにある。その結果，接辞が付与されるという要因が一律に受け継ぎを阻害するのではなく，接辞がどのような意味を語幹に付与するのかということを考慮に入れる必要があることを述べる。コーパスが直観判断の妥当性の検証や語彙の質的側面の研究に貢献することを示す。

キーワード

受け継ぎ，接辞，*disagree*, *miscalculate*

1. はじめに

近年，文法よりも語彙を重視する発言がたびたび見られることからも理解されるように，外国語学習において語彙修得の重要性は論を俟たない。

(1) Grammar as structure is subordinate to lexis. (Lewis 1993: vii)

しかし，一口に語彙の修得と言っても，修得する語の数を増やしていく側面と，ひとつひとつの語の使い方に習熟する側面がある。前者はもちろん肝要ではあるが，それだけでは不十分であることは次のような発言からも理解できる。

(2) 従来の英語学習において最重要視されていたのは，覚えるべき「単語の数」であったとしてよい。（中略）「単語数信仰」をやめ，「語のつながり信仰」に大きな路線変更をしなければ，わが国における英語教育の進展は望みえない（後略）。（安井・久保田 2017: v）

ここで言う「語のつながり」とは，コロケーションのような語と語の連結だけでなく，前置詞や補文といった文法的な要素と語のつながり（いわゆるコリゲーション）も含めたものと考えるべきである。すなわち，「つながり」の習熟はいくつかの語の連鎖パタンの習熟ということに他ならない。このような言語における「つながり」の重要性は，Lewis（1993: vi）の The grammar/vocabulary dichotomy is invalid; much language consists of multi-word 'chunks' という言葉が端的に示している。文法と語彙を画然と分けてそれぞれを別に学習するのではなく，語彙の修得自体が語の振る舞いの修得に他ならないと考えるべきである。言語を修得するというのは，身につける語数の拡大を目指すだけでなく，複数語よりなる連鎖の振る舞い，すなわち grammaticalised lexis（Lewis 1993: vi）を修得することである。

実際問題として，ある程度の英語力を有した学生の産出する英語の中にも，次のような「英語らしくない英語」が頻繁に見られる。以下は，半年間アメリカに留学した学生が発した英語である。

(3) a. I enjoyed to sing with my girlfriend.
b. The teacher judged him that he is not a good student.

これらを見ると，学習初期に強調される「enjoy は V-ing 補文を取る」ということが修得されておらず，また，judge が取る補文形式も正確に理解されていないことがわかる。このような例は，学習者の中で，語そのものを覚えることとその語の取るパタンの修得が乖離してしまっていることを示している。当然ながら前者に比べて後者はより難しい。とするのであれば，身につけた語彙の質的な向上のために「つながり」の修得へ方向転換するべきであるという主張も一理あると言えるだろう。

語の振る舞いの実証的な研究，いわゆる語法研究の立場から，このような「つながり」や「パタン」の実態を眺めてみると，「つながり」の典型性を見極めるのは，実は考えられているほど容易ではない。語彙はすべて同じようなステータスで存在しているのではなく，基本語から周辺的な語へと段階的なあり方をしている。コアとなる基本語の場合，使用頻度も高く，辞書や文法書を参照しながら，つながりの典型性を判断することは比較的容易である。一方で，少しずつその中心部から離れて周辺部に存在する語彙になると，その実態を把握するのが難しくなる。

このような状況は英語母語話者でも同様であり，ある連鎖の可否について，母語話者の間で意見が分かれることがしばしばある。例えば Denison（1998: 260）は，ignore や support が that 節を従えた実例を引用しているが，このような動詞に直接 that 節が後続する形に違和感を持ったのか，彼は，これらはもともと ignore the fact that…/support the suggestion that… という形から the fact/the suggestion といった名詞句が省略されたものだと考えている。このように，ある動詞が that 節や不定詞の補部を取るかどうかという単純な問題にしても，辞書に記載がない，

辞書の記述が変わる，母語話者の直観と実態に齟齬が生じる等々，判断を難しくする要因は多い（住吉（2016））。筆者の手元に，This birthday is special because it celebrates that a girl is not a child anymore and has become a woman.（M. Broukal, *Weaving It Together*, 2nd edition（2004）. p.67）という例があるが，辞書などには記述がないため，＜celebrate + that 節＞のつながりに正統性を与えてよいのか悩ましいところである。

ここで接辞付与の点から，このような補部のつながりの可否判断を難しくする例を見てみよう。Carlson and Roeper（1981）は，接辞などがつく派生語は，派生前の語が取っていた名詞以外の統語構造を受け継がないと主張している。そして，両者の間に見られると彼らが考えている，次のような対照的振る舞いを挙げる。

(4) a. Bob told a story.
b. Bob retold a story.
c. Bob told Eddie to leave.
d. *Bob retold Eddie to leave. (Carlson and Roeper 1981: 124)

tell は名詞句および NP + to V の構造を取るが，接辞の付与された retell はそのうち名詞句補部のみを受け継ぐという主張である。(4)のような判断は，主に理論的な言語学でよく行われている直観による文法性の判断にもとづくものであるが，この Carlson and Roeper の判断が英語の実態の反映であるとは言い難いことが指摘されている（Sampson 2014: 79ff.）。

頻度の高い中心的な語の取るパタンの典型性については異論を差し挟む余地はほとんどない。一方で，派生語彙の取る統語パタン，すなわち他の語とのつながり方，については，語彙研究の中でも手薄な分野である。英語学習において修得する単語の数を増やすだけでなく，それぞれの語のつながりも修得することが重要であるとすれば，このような周辺語彙の振る舞いも体系的に明らかにしていくことが学習者のためにも必要である。また，このような問題は英語学的な観点からも興味深いものがある。

本稿はそのような研究の例として，disagree/miscalculate という語と that 節の補部の受け継ぎに焦点を当てて，コーパスにもとづいてその振る舞いを確認してみたいと思う。本稿の目的はそのような研究の重要性を理解していただくことにあり，実際の具体的な語のつながりの検討の多くは稿を改める必要がある。

2. 受け継ぎ

ここで受け継ぎについて簡単に述べておく。受け継ぎ（inheritance）とは，動詞・形容詞に接辞がついて派生語を作る際に，その派生語が，もとになった動詞・形容詞が取る統語構造をそのまま引き継ぐことをいう（中野他（監修）2015: 96）。形容詞 able は不定詞を取って＜able + to do＞というパタンを形成するが，派生語 ability もそのパタンを受け継ぎ ＜ability + to do＞というつながりをつくる。＜argue + that 節＞から＜argument + that 節＞が生まれるのも同じ理屈である。

このような受け継ぎの考え方は教育的な効果も期待され，受け継ぎを理解しておけば，日本人英語学習者がよく犯す誤りである ?ability of V-ing という連鎖の産出を防ぐことができる。かつて出版されていたある英和辞典には，このような受け継ぎについての囲み記事が多く掲載されていたが，それはその教育的な効果を狙ってのことであろう。

一方で，受け継ぎの関係が成り立たない場合もある。動詞 judge と派生名詞 judgment の間に見られる補部の受け継ぎを見てみよう。Faulhaber（2011: 338）は，＜think/judge + that 節＞のパタンは問題ないが，前置詞 about とのつながりに目を向けると，＜think + about X＞は容認されるが，＜judge + about X＞は典型的でないと指摘している。Faulhaber はこのような振る舞いの相違を，ふたつの動詞の意味的な違いに求めている。曰く，judge は think よりも時間幅の少ない行為であり（less durative），行為の終結点をより明示的に示す（more telic）ため，判断の結果を表す that 節と共起するという。つまり，動詞 judge はトピックを表す前置詞 about との親和性が低いということになる。では，名詞 judgment と about のつながりはどうであろうか。名詞の場合，＜judgement + about X/that 節＞はどちらも問題ない。つまり，judgement は judge から that 節を受け継ぐ一方で，前置詞 about についてはその受け継ぎ元がないということになる。

judge/judgement の例が示すことは，もともと動詞が取っていなかった about とのつながりが judgement では現れるという，いわば「無から有」の変化である。このような受け継ぎの偏在的な特質を，より理論的な観点から説明しようとしたものが，上でも触れた Carlson and Roeper（1981）である。彼らの主張を簡単にまとめると，「接辞やその他の要素の追加された派生語は，もとになった動詞が取る名詞以外の補部を受け継がない」ということである。すなわち彼らは「有ったつながりが無くなる」場合の受け継ぎについて検討したものである。「接辞やその他の要素」とは，「接頭辞（retell），接尾辞（glamorize），副詞辞（throw out），複合語要素（air-condition）」であり，受け継ぎが阻害される補部として「文補文，前置詞句，副詞類，原形不定詞，不定詞など」が挙げられている。派生語や派生表現は，もとになった動詞の「名詞句を取る」という特性だけを受け継ぐという主張である。彼らが挙げている接尾辞が付与された場合の例を見ると，「glamorize は名詞だけを目的語にする」ということを述べており，本来的な受け継ぎを意味していない場合がある。動詞から名詞を派生させるケースが含まれておらず，その点において「派生語」の概念が一般的に言われる受け継ぎの場合よりも狭くとらえられているが，本稿での議論とは直接関係するものではないので，ここでは問題にしないでおく。本稿での議論と関係する彼らの主張は，「接頭辞がついた動詞は，もとの動詞の名詞句補部のみを受け継ぐ」ということである（詳しくは，Carlson and Roeper（1981）を参照）。

では，このような理論的な主張は，どの程度英語の実態を反映しているのであろうか。Sampson（2014: 81ff.）も，この主張には疑問を投げかけている。語彙研究におけるコーパス使用の利点は，語彙やパタン（つながり）の出現頻度の統計的な処理だけでなく，理論的な観点から提示された意見をデータを用いて検証し，英語の実態を明らかにできることにある。派生語，派生表現は無数に存在し，この小論ではすべてにわたって検証を行うことは不可能である。本稿では，ケーススタディ

として agree/disagree，calculate/miscalculate と that 節の受け継ぎについて COCA（Corpus of Contemporary American English）のデータをもとに検証を行ってみよう。

3. 受け継ぎの実態

3.1 *agree* vs. *disagree*

Carlson and Roeper（1981）の主張に従えば，agree に否定接頭辞 dis- が付与された disagree は，agree の取る補部は受け継がないということになる。もともと agree は名詞句を直接取るわけではないので，agree が取る名詞句だけを disagree が受け継ぐということにはならないが，他の補部についてはどうであろうか。ここでは that 節の可能性について見てみよう。＜disagree + that 節＞の可能性については，住吉（2017）でも検討されているが，定量的な考察は行われていない。ここで従来の説について概略を振り返りながら，COCA を使用し定量的な検証も行ってみようと思う。

disagree が that 節を従えるかどうかについては，Carlson and Roeper の一般的な主張以外にも，いくつかの文献が否定的な態度を示している。

(5) In fact, in the case of disagreeing, the emphasis seems to be more on saying that one does not think the same than on saying what one thinks. This is reflected in the tendency of *disagree* not to be followed by a *that*-clause. (Wierzbicka 1987: 128)

Wierzbicka は，disagree の意味的な側面に注目し，disagree は「不同意を示すこと」に焦点があるため，不同意の内容を表す that 節を取りにくいと述べている。「取りにくい傾向」というのは「取らない」と同義ではないので，次のような例があったとしても決して不思議ではない。

(6) "I disagree that students are making up for the budget crisis." (*The Lumberjack*, April 3-9, 2002)

一方で，「取るか取らないか」という観点ではなく，「取り方」の側面からの説明を提示するものもある。以下の Turton and Heaton（1996）は，英語学習者の「誤り」を数多く指摘し，規範的に「正しい」形を提示する。その中で，（7a）は（7b）のように訂正すべきであるとされており，＜disagree + that 節＞は，非特定的な主語で，否定的な文脈に生じて，ある種の総称的な同意を示す時に使われると主張する（以下の引用文中のボールドは出典のママ。下線は筆者）。

(7) a. ?I disagree that heart transplants should be stopped.
b. ✔I don't agree that heart transplant should be stopped.

(8) When the subject is a particular person, use **not agree** to introduce a **that** clause: 'I don't agree that the people there are repressed.' 'She cannot agree that farmers

should be an exception.' In more general statements, **disagree** is usually used with **not**, **nobody etc** before a **that** clause, to give an affirmative meaning: 'No one can disagree that these crimes must be stopped.' (= everyone must agree that…) 'Few would disagree that she has served her country well.' (= most would agree that…) (Turton and Heaton 1996: 100)

上で(6)に挙げた例では, I が主語に立ち, 否定辞の生じない文で使用されており, (8)の主張とは明らかに特徴を異にしている。Turton and Heaton の言うような disagree の that 節の取り方, すなわちつながり方, の制約は, 英語の実態として存在するのであろうか。確かに, 次の例に見られる＜disagree + that 節＞の例は,「否定文脈」「主語は非特定的」という両方の条件を満たしている。

(9) Jack, *nobody* is going to disagree that SeaWorld does a lot of incredible rescue work. (COCA, CNN)

しかし, 次例はその条件を満たしていない。(10)(11)は特定的な人物が主語に立ち肯定的文脈に生じているし, (12)(13)は, ある種の集団の中での不同意の割合を示しており, 否定的な文脈で肯定を示すものではない。

(10) *The minister* will probably disagree that it's stuck. (COCA, CNN)
(11) In a phone interview, *Trump*, of course, disagreed that his endorsement would be harmful. (COCA, Washington Post)
(12) *Thirty percent of Hungarians and 22 percent of Poles* disagreed that diversity was a good thing, … (COCA, New York Times)
(13) *65% of the students* either moderately or strongly disagreed that they had been in dangerous situations… (COCA, Academic)

Turton and Heaton の主張の妥当性を検証するため, ここで簡単な定量的調査をしてみよう。COCA で disagree + that の連鎖を検索すると, 関係する形が 279 例ヒットする(disagree は異形を含まず。disagree に that が直接後続している場合のみ。2017 年 3 月 11 日検索)。その例を, 主語が特定的か非特定的か, 文脈が肯定的か否定的かで分けてみる。dis-が否定的な接頭辞であるので, 肯定的・否定的というのは誤解を招く恐れがあるが, ここでは disagree と not/nobody/few などの否定表現が共起している場合を否定的, disagree 単独で生じているときを肯定的と考えられたい。検索で得られた例をひとつひとつ確認した結果を表 1 に示す。分類に当たっては, 特定の人物を指す語以外の many/few/無冠詞複数名詞といった語が主語に立つときは非特定的なものと考える。集団の中での割合を示す(12)(13)のような形は個人が特定される

わけではないので, これも非特定的と考える。また, it is hard to disagree のようなものは, 否定的な文脈と考えて分類した。

表 1 COCA における＜disagree + that 節＞の割合

主語が非特定的かつ肯定	54 (19.4%)
主語が非特定的かつ否定	73 (26.1%)
主語が特定的かつ肯定	120 (43.0%)
主語が特定的かつ否定	32 (11.5%)
計	279 (100%)

ここからわかるように, Turton and Heaton のいう規範に従った例(主語が非特定的かつ否定)は全体で 26%ほどであり, 4 割強が「特定的主語かつ肯定」という形で生じていることがわかる。すなわち, ＜disagree + that 節＞は, Wierzbicka の言うように不同意を示すことに焦点が置かれているわけでもないし, Turton and Heaton が言うように不特定主語と否定的文脈で総称的同意を示す用法でのみ用いられるわけでもないのである。

このように, agree から disagree が派生した際に, that 節は阻止されることなく受け継がれる。また, 実態を見ると＜disagree + that 節＞は＜agree + that 節＞の単純な否定形として使用されることがもっとも普通である。 dis- の接頭辞は, 次の Plag(2003: 100)の説明からも理解されるように, 語幹となる動詞の意味を否定しており, 文否定の not と同じ役割を果たす。

(14) [T]his suffix uniquely offers the possibility to negate the base verb in much the same way as clausal negation does: *disagree* 'not agree,' *disobey* 'not obey,' *dislike* 'not like.' (Plag 2003: 100)

dis- が単なる否定の意味となるのであれば, I do not agree that he's a racist.(COCA)といった例に見られる do not agree that が disagree that として現れると考えると, 表 1 のような結果もそれほど不思議ではないだろう。

3.2 *calculate* vs. *miscalculate*

次に, calculate の取る that 節が miscalculate に受け継がれるかどうかについて考えてみよう。calculate は that 節を従えて,「…と計算している」という計算結果の内容を示す用法((15))と, そこからより抽象的に意味を発達させた「…と推測する」という認識の意味を表す用法((16))を持つ。前者の場合, 計算の結果得られた数値が that 節内で述べられる。

(15) The groups calculate that Bloch has lost about 20 percent of the headquarters legal

and investigative staff and about half of the legal staff assigned to investigate retaliation and other prohibited personnel cases at headquarters. (*Washington Post*, 18/March/2005)

(16) … the White House calculated that Miers would draw broad support. (*Washington Post*, 04/October/2005)

Carlson and Roeper は，複合語も受け継ぎを阻害する要因として挙げていたが，次の back-calculate（「逆算する」）は，複合語にも関わらず that 節を calculate から受け継いでいる。

(17) U.S. scientists back-calculated that the reactors leaked about 365 times the acceptable amount of radiation－or 400 billion neutrons－into the air. (*TIME*, August 29, 2011)

このような例は，複合語の場合に必ずしも受け継ぎが阻害されるわけではないことを示している。

では，mis- の接頭辞を持つ miscalculate はどうであろうか。Carlson and Roeper は自分たちの主張通り，miscalculate が calculate から that 節を受け継ぐことを認めていない（下線は筆者）。

(18) *Bob miscalculated that we would arrive at nine o'clock. (Carlson and Roeper 1981: 129)

ここで実態を確認するために COCA で簡単な調査をしてみよう。COCA では，calculate が 16530 例ヒットする（変化形を含む）。一方， miscalculate はわずか 394 例である（変化形を含む）（2018 年 8 月 23 日検索）。その例をひとつひとつ見ていくと，＜calculate + that 節＞のつながりが 1220 例確認され，calculate 全体の出現数に占める割合は 7.4%となる。＜miscalculate＋that 節＞はわずか 2 例で，miscalculate の出現数に占める割合は 0.05%であり，このような低頻度の形をうんぬんすることすらはばかれるような状況がある。

実際の＜miscalculate + that 節＞の例は以下の通りである。

(19) And it miscalculated that it could divide the international community and gain something thereby from its aggression. (COCA, Spoken)

(20) In 1980 Hussein miscalculated that Iran could be easily defeated following the purges of its military command by Khomeini's clerics, and that its leadership would capitulate following the conquest of western and southwestern Iran; …

(COCA, Academic)

どちらも認識的な「誤った推測をする」という意味で用いられている。

次の手元の例（21）は,「ケリーは自身の経歴が…彼の資質について投票者たちを満足させるに十分だと推測していた。今では支援者たちは, それは間違った推測だったと言っているが」となる。calculate と that 節の間に miscalculate が挿入された変則的な例であるが, that 節は calculate の内容と miscalculate の内容を表す。

(21) At the time, Kerry calculated —aides now say miscalculated— that his Vietnam and Senate résumé would be enough to satisfy voters of his ability to serve as commander in chief and allow him to focus more heavily on health care, education and the economy. (*Washington Post*, September 29, 2004)

コーパスでの検索結果を考えると, ＜miscalculate + that 節＞を非文法的とは断言できないが, miscalculate の頻度の低さと相まって, 非常に使いにくい形であることは間違いない。そのような意味においては, Carlson and Roeper の主張には妥当性があると言える。この miscalculate と that 節のつながりの悪さの理由はどこにあるのであろうか。

mis- という接頭辞は動詞の意味に 'inaccurate(ly), wrong(ly)' という意味を付け加える (Plag 2003: 100)。非常に単純な意味を付け加えるようであるが, いくつかの動詞では, mis- の付与が意味解釈を難しくする場合がある。英語について種々の話題が議論されているインターネット上のサイトである Language Log (http://languagelog.ldc.upenn.edu/nll/) (July 30, 2018) では, 同じ mis- のついた派生語である misunderstand と that 節のつながりの悪さについて, その意味解釈の点から意見が提示されている。この形は(i) fail to understand that…「…を理解していない」の意味と(ii) mistakenly understand something to mean that…「…だと誤解している」の意味に解釈をする英語母語話者が存在するため, 意図する意味が正しく伝えられない場合があるようである。議論の中で提示されている次の例を見てみよう。

(22) However, he misunderstands that it's actually the people that secure our nation.

この例を(i)の意味で解釈すれば「国を守るのは国民であることを理解していない」つまり「国を守るのは国民である」と言っているが, (ii)の意味で解釈すれば「国を守るのは国民であると誤解している」つまり「国を守るのは国民ではなく例えば軍隊である」ということになる。(i)の解釈と(ii)の解釈で全く正反対のことを述べることになる。

calculate は上で述べたように, that 節を従えて計算の結果を述べる用法と推測する内容を述べる用法を持つ。これがそのまま＜miscalculate + that 節＞に受け継がれるとすると, 特に前者の計算の意味では「…と計算していない」すなわち「…なのを計算違いする」(that 節で述べられるの

は計算の結果得られるはずだった正しい内容)と「間違った計算の結果…ということになる」(that 節は間違った計算の内容)の両意に解釈される余地を生む。計算の意味での＜miscalculate + that 節＞の例が確認されにくいのはこのような事情からであろう。Carlson and Roeper の挙げる(18)の例でも,「9 時に着けるのを計算違いした(例えば, 9 時に着くのに 8 時到着と計算違いしてしまった)」の意味と「間違った計算の結果, 9 時に到着するということになった(我々は 8 時に到着するのに, ボブは我々が 9 時着と誤った)」の両義に取れ, 極めて分かりにくい意味解釈になることがそのつながりに正当性を与えられない理由であろう。

一方で, 意味が抽象的に拡張した「推測する」では, (i)に相当する「…と推測していない」の意味には基本的にはならないので, このような意味的な両義性は存在しにくい。抽象的な意味では「誤った推測をする」の意味になり曖昧性が排除されるので, (19)(20)(21)のような例がまれに見られると考えられる。すなわち, that 節の受け継ぎを阻むのは単なる接辞の付与という形式的なことが要因ではなく, 語幹となる動詞の意味と接辞の意味の関係であると考えるべきである。特に否定接頭辞の場合, 語幹の意味に単純な否定の意味を追加すると考えられる場合に, もとの語から that 節を受け継ぎやすいと言えるだろう。

4. おわりに

本小論では, Carlson and Roeper (1981) の主張を議論の発端として, 動詞とその否定的派生語の that 節の受け継ぎの実態をコーパスの例をもとに考えた。disagree は, agree の取る that 節を受け継ぎ, ＜disagree + that 節＞というつながりを作ることに問題はないが, ＜miscalculate + that 節＞は使いにくいつながりであることが分かった。すなわち miscalculate は calculate から that 節を受け継ぎにくいということである。簡単な調査ではあるが, ここでの議論は語と語のつながりの実態を明らかにしていくことの重要性を説くひとつの試みである。

コーパスは, 語の頻度といった量的な調査に大きな役割を果たすのは当然であるが, 言語学者の主張の正当性の検証に果たす役割も大きい。次の Sampson and Banarczy (2014: 79) が指摘するように, 言語学者の直観が英語の実態を反映していると言い難い状況があることを考えれば, 理論的な立場から提示される文法性の可否判断をコーパスによって検証することの重要性は論を俟たない。

(23) There is no reason to assume that patterns in a speaker's intuitive grammaticality judgements reflect realities of his language. (Sampson and Banarczy 2014: 79)

住吉 (2003) は, 理論的な立場にたつ言語学者たちが＜apologize + that 節＞, ＜express + that 節＞というつながりを不可としている判断が誤りであることを, 実例をもとに明らかにした。この主張を大規模コーパスで追跡調査したものが西原他 (2018) である。西原他は, COCA, GloWbE, COHA といったコーパスを用いて, 住吉 (2003) の主張の正しさ

を実証している。このように,「つながり」の研究は, コーパスの大規模化と相まって, 周辺的な語彙を対象とする, より幅広い現象に広がっていくことが期待される。

一方で, このような検証を行う際には, コーパスから都合のいい例だけを抜き出して注目してしまう陥穽があることを認識しておかねばならない。Hanks（2013: 7）は, 次のようなたとえ話でこれを戒めている。

(24) [O]thers have in recent years treated corpora as 'fish ponds' in which to angle for fish that will fit independently conceived hypotheses and theories. Fish that don't fit the theory are thrown back into the pond. (Hanks 2013: 7)

ここでは「仮説や理論」と表現されているが, 英語母語話者の直観を検証する際にもこの戒めは常に念頭に置いておかねばならない。ここでの議論でも明らかになったが, コーパスに＜miscalculate + that 節＞の例が見られるということが, そのまま Carlson and Roeper（1981）の主張の反例になるということにはならない。たとえコーパスの検索によって直観に反する例が見つかったとしても, その例の存在の意味を考えねば, コーパスが都合のいい例を漁るための単なる fish pond になってしまう危険性がある。

言語研究における語彙の重要性の認識の広まりと, コーパスの大規模化・多様化によって, これまでは検証の難しかった事例が検証可能となる段階に入っている。Bolinger が 40 年以上前に主張していたように, 語彙研究は今後ますます研究者の関心を引き付けていく分野となるであろう。

(25) I want to suggest that (中略) the lexicon is central, that grammar is not something into which words are plugged but is rather a mechanism by which words are served, and that lexicology ought to absorb, starting now, a major part of our energy as linguistic scientists. We simply need to know more about the lexicon before we can make further progress in other fields. (Bolinger 1973: 9)

語彙研究の深化のためにも, 今後, 頻度のみならず, 語とそのつながりの振る舞いの綿密な考察・検証という点において, コーパスの徹底的な利用が望まれる。

謝辞

本論は, 2018 年 8 月 24 日（金）に京都キャンパスプラザで行われた英語コーパス学会語彙研究会夏季セミナー「コーパスと語彙 2018」において「語の派生と補文の受け継ぎの関係について」というタイトルで口頭発表した内容を一部拡大したものである。本研究の一部は科学研究費（17K02833）の援助を受けている。

引用文献

Bolinger, D. (1973). Getting the words in. In R. I. McDavid, & A. R. Dukert (Eds.). *Lexicography in English* (pp. 8-13). New York: New York Academy of Sciences.

Carlson, G. & Roeper, T. (1981). Morphology and subcategorization: Case and the unmarked complex verb. In T. Hoekstra, H. van der Hulst & M. Moortgat (Eds.). *Lexical grammar* (pp. 123-164). Dordrecht: Foris.

Denison, D. (1998). Syntax. In R. Suzanne (Ed.). *The Cambridge history of the English language. Volume IV. 1776-1997* (pp. 92-329). Cambridge: Cambridge University Press.

Faulhaber, S. (2011). Idiosyncrasy in verb valency patterns. *Zeitschrift für Anglistik und Amerikanistik 59*(4), 331-346.

Hanks, P. (2013). *Lexical analysis: Norms and exploitation*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.

Lewis, M. (1993). *The Lexical approach*. Boston: Thomson.

中野弘三・服部義人・小野隆啓・西原哲雄 (監修) (2015)『英語学・言語学用語辞典』東京: 開拓社.

西原俊明・林田朋子・西原真弓 (2018)「メッセージ伝達を意味する動詞と that 節について－動詞 apologize, express, inform, convince を中心に－」『長崎大学言語教育研究センター論集』*6*, 19-32.

Plag, I. (2003). *Word-formation in English*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sampson, G. & A. Babrczy (2014). *Grammar without grammaticality: Growth and limits of grammatical precision*. Berlin: Mouton de Gruyter.

住吉誠 (2003)「That 節をとる動詞の理論と実際 － apologize, express, depend とthat 節」『英語語法文法研究』(英語語法文法学会) *10*, 102-116.

住吉誠 (2016)『談話のことば2―規範からの解放』東京: 研究社.

住吉誠 (2017)「フレーズと補文―フレーズ補文の実態解明をめざして―」『摂大人文科学』*24*, 107-126.

Turton, N. D. & J. B. Heaton (1996). *The Longman dictionary of common errors*. 2nd edition. London: Longman.

Wierzbicka, A. (1987). *English speech act verbs: A semantic dictionary.* New York: Academic Press.

安井稔・久保田正人 (2017)『英語クラスターハンドブック: 基本単語のつながり用例辞典』東京: 開拓社.